

受付番号

11-012

留学・研究計画書

氏名 小野田 恵	留学機関名 ハノイ国家大学付属 ベトナム学発展学院
留学先国名 ベトナム社会主義共和国	留学期間 西暦 2011 年 10 月 ~ 2013 年 9 月
研究テーマ ベトナム北部における社会構造変質の考古学的研究 -金属器時代から北属期へ-	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究では、ベトナム北部における金属器時代と、それ以後に続く北属期の両時代の過渡期を対象とし、墓及び副葬資料から文化と社会構造の変質を明らかにするものである。ベトナム北部における金属器時代研究と北属期研究は、特に20世紀初頭からフランス極東学院による調査と研究業績があげられ、現在においてもそれらの研究成果に依拠するところが大きい。しかし、ベトナム国内において、独立以後は各研究機関の整備が行われていく中、特に金属器時代、とりわけドンソン文化に対する学術的調査が数多くなされるようになり、ベトナムの国家形成論とも密接に結びつく主要な研究テーマの一つになっている。一方で、紀元前2世紀から10世紀にわたって中国支配を受けた北属期研究では、主に漢代並行期を中心とする、中でも塚室墓の分布調査及び発掘調査が近年まで行われている。さらに植民地時代にまとめられた研究成果を併用しながら、北属期の考古学的知見をベトナム考古学研究の中で幅広く提示されるようになった。</p> <p>しかし、以上のような両時代における研究領域に伴う問題点としてあげられるのは、研究分野の偏りと、双方の時代を視野に入れた研究の欠如である。特に北属期は文献資料に記載されるように紀元前2世紀より続く一千年もの長期間であったにも関わらず、研究面では個別的な資料提示や発掘の概要報告が行われるに過ぎず、考古学資料においても地域毎の詳細な研究と資料化が乏しい現状である。また、「中国支配期」という政治的要素も研究が滞っている理由の一つである。この時期の金属器時代は上記に示すように比較的詳細な研究が進んでいるが、植民地時代の研究を基礎にした資料提示に留まる傾向がある。両時代はベトナムの歴史の中で総合的に論じられるべきであり、異なる社会構造・文化変容を含む総合的な視点から、ベトナム北部に形成された2つの社会間における繋がりを見出すことが求められる。</p> <p>基礎的な研究、調査として、修士論文では北属期時代の「墓制」をテーマに、塚室墓を対象として、集中的に築造されたと考えられる紀元前2世紀から後2世紀までを中心に、北部のハイズオン省における新たな塚室墓資料の資料化を行い、資料から割り出された時期における同地域の役割について論じた。したがって、本申請における研究範囲は、北属期以前の金属器時代、特にドンソン文化期を下限とし、それ以降北属期において特に中国系の文物が多く残る紀元後3世紀を上限としたい。この2つの時代を含む文化圏はベトナム北部の紅河流域から、北中部まで広範囲に広がっており、各時代の文化圏を詳細に把握することで中国勢力が介入する以前の文化と社会、北属期への過渡期における社会、それ以後のベトナム社会の変化と文化構造の変質という、3つの可能性を見出すことを視野に、ベトナム北部の歴史的発展段階の中に位置付けることを試みるものである。</p>	

成果報告書

記入日 2013年10月26日

氏名 小野田 恵	留学先国名 ベトナム	所属機関 ハノイ国家大学・ベトナム学開発科学院
----------	---------------	----------------------------

研究テーマ：

ベトナム北部における社会構造変質の考古学的研究-金属器時代から北属期へ-

留学期間 : 2011年 10月 ~ 2013年 9月

1. 留学全般についての感想

ベトナムで長期滞在を行いながら調査活動に集中することができ、大変貴重な2年間を過ごすことができました。2年間は日々充実していましたが、留学開始後は、今までの大学の研究室を軸とした調査活動から、今後の自分のための研究活動に向けた、新たな人間関係の構築や研究基盤作りをすることが必須でした。そのため、うまく進まない事や準備不足を認めない部分もあり、調査方法や研究の方向性についても再考せざるをえない場面もありました。特に私が研究対象としている北属期の古墓研究は、専門的に行っているベトナム人考古学者が少ないため、いざ現地に滞在してみると、その研究に限定した人間関係の構築はやや難しいことがわかり、指導やアドバイスを求めるのに苦労をしました。しかしその中で大きな収穫だったのは、滞在中に他分野や他の時代を研究する研究者と交流を図る機会に多く恵まれ、思いもよらない考えやアドバイス、そして刺激的な意見を聞くことが出来たことです。交流をした方々は年代を問わず研究内容も様々でした。このような中で、今後の研究の展開方法だけでなく、将来的にどのようにベトナム考古学研究に関わっていけば良いのか、そして考古学研究がベトナム研究全体のなかで、今後はどのような場面で生かされ必要とされるかということを考える良い機会となり、大変実りある2年間になりました。

調査活動では、所属先のベトナム学開発科学院に大変お世話になりました。調査前には所属先に調査申請書を提出し、調査先から承諾を得ることで、現地調査は問題なくこなすことができました。

しかしベトナムの場合、調査申請の許可が通るまでに大変時間がかかるため、最低でも1か月から2か月前には申請書を準備し調査先の機関に打診せねばならず、承諾まで長い間待たなければなりません。既に調査を重ね、親密な関係をもつ調査機関の場合は、許可がおりやすく相手からの返答も早いですが、自分が初めて資料調査を行う所や他の省に出向く場合は、申請まで時間がかかることが多く、苦労しました。実際、滞在中に調査申請を行ったハノイ国立歴史博物館では、1回目の調査は承諾いただきましたが、2回目は1か月半返答を待ったにもかかわらず承諾に至ることができず、悔しい思いをしました。

修士課程までは1年のうち最大で2回程の短期滞在でしたが、2年を通してハノイで生活することで気候の変化や人々の生活リズムや考え方、街の移り変わりをみることができ、ベトナムについて知らなかった事が意外に多くあることもわかりました。また、北部以外の中部や南部との違いを改めて肌で感じることで「研究対象としてのベトナム」だけでなく「国としてのベトナム」の理解にも努めていこうと、新たな決心と目標を設定することができ、大変有意義な2年間であったと思います。

2. 現地での生活と調査準備

留学期間中はハノイを拠点にして日常生活を送っていました。調査準備のためにまず時間を費やしたのはベトナム語の習得と調査研究に関連する書籍や報告書類の収集です。

ベトナム語は所属先のベトナム語の個人クラスの他、家庭教師の先生と勉強に励みながら留学1年目の半年程は集中してベトナム語習得に励みました。さらに1年目の後半からは、フランス植民地時代の調査研究をまとめたフランス極東学院発行の報告書利用に備え、ベトナム語とあわせてフランス語の習得も行いました。その間に行った考古学関連の基礎的な報告書等の収集では、新刊書と合わせて特に古本を購入するのに奔走しました。研究対象である金属期時代と北属期の研究成果が盛んに報告されたのは、1980年代以前のもので多いためです。収集する過程で、貴重な書籍や発行部数の極少な資料に出会えた時は、喜びを感じずにはいられませんでした。研究資料として集めたものは考古学関連の報告書の他、北部各省の地誌も集中的に収集しました。今後地誌は、考古資料と遺跡の分布状況に加え、地理情報と歴史的変遷も総合して検討するために活用する予定です。生活に関して、現地ではアパートではなくベトナム人の大家さんの一軒家に間借りをしていたため、季節の行事やベトナム家庭料理を体験しながら生活を共にすることができました。意外だったのは旧正月のハノイの様子です。旧正月期間前後は田舎へ帰省する方々が多いため、普段は騒音と人と車両で溢れているハノイが静寂になり、落ち着きを取り戻す様子には歴代の王朝が置かれていた都としてのハノイを少し垣間見たような気がしました。

3. 調査活動報告

調査活動では、本来の目的である金属期時代と北属期の古墓資料の調査の他、他機関との共同調査にも参加し、新たな知見を得ることができました。古墓資料の調査では、北部はハノイ国立歴史博物館、ヴィンフック省、北中部ではハティン省とゲアン省において、考古資料の実見と遺跡の踏査を行いました。共同調査では、東京文化財研究所と共に、ハノイにあるタンロン皇城遺跡の保存管理の一貫として、同遺跡に関連する考古資料調査に参加しました。これらの調査が有意義であったのは、私が研究対象とする時代は紀元前後からおよそ10世紀までの範囲ですが、今回の共同調査では11世紀から15世紀までが調査対象に設定されていたため、ほぼ連続した時代の考古資料を実見し調査できたことです。その他に、これは自大学の研究室で通年おこなっている調査ですが、中部のクアンナム省内のホイアンで行われた、発掘調査に基づく考古資料の整理作業に携わり、主に17世紀から18世紀までの考古資料の実見と実測作業を行いました。これらの各調査の目的と地域は異なるものですが、幸運にも留学中にほぼ連続した18世紀までの考古資料を実見することができ、調査をする機会が得られたのは大きな収穫でした。

しかし残念だったことは、留学中の目標の一つに入れていた「現地での発掘調査」を行うことができなかったことです。発掘調査は1人では行うことはできないので、やはり調査チームを自分で結成するか、発掘調査を行っているベトナムの諸機関に出向き、調査参加申請を行う必要があります。しかし留学中は、自分が研究対象としている時代の発掘調査に参加する機会がなかったため、目標達成が出来ずに終わりましたが、ハノイの考古学院やタンロン都城センターの方々のご厚意で、発掘調査の現場を見学することができました。双方の機関には大変感謝をしております。今後は考古資料調査の実見と精査から得た知見を蓄積していきながら、現地での発掘調査計画について考えていきたいです。

4. 調査成果報告

まず、金属期時代から北属期に関する考古資料調査では主に「古墓」から出土した副葬品の実態と組成の把握を目的に実見調査を行いました。

ハノイの国立歴史博物館では主に、紀元後2～3世紀と考えられる北属期の古墓資料を調査することができました。実見できた考古資料は、1964年に博物館内に保管されたものが中心で、全てハノイ以外の省から発見され収集されたものでした。ここでは集中して実見できる長期の調査機関を設けることができ、年代指標となりそうな古墓関連の考古資料や、改めて再考が必要と思われる資料もあり、所蔵遺物の実状を知るための良い機会となりました。次のハノイの西北に位置するヴィンフック省でも、北属期段階と思われる古墓関連の考古資料を見ることができました。ここでは墓の構築材である埴（レンガ）の一部が保管されており、今後は、北部域の古墓における構築材の規格や文様変遷の把握のために、有効活用ができると考えられます。そして、北中部のゲアン省博物館では、金属期時代と北属期、両時期の古墓資料の調査を行う機会に恵まれました。しかし、同博物館では金属期時代の資料の所蔵数が圧倒的に占めていましたので、それらを中心に実測作業等の丹念な調査を行いました。そしてハティン省では、北属期段階の古墓の発見地を案内していただきながら、踏査を行いました。現在、遺跡は残っていませんが、遺跡の分布域と地理を総合的に見られたことで、2地域の古墓研究について、新たな研究課題の設定することができました。ゲアン省では博物館側の方のご厚意で、収蔵庫内で作業をすることができ、多くの遺物の観察や説明を受けることができたことは、大変貴重な時間でした。

共同調査では北部を中心に調査を行い、バクザン省、クアンニン省、クアンニン省の島嶼部、さらにバクニン省、フナイエン省、北中部ではゲアン省と、多くの省に出向き他分野の方々と意見交換を行いながら、調査を進めることができました。建造物関連の考古資料の調査が中心でしたので、ベトナムの古建築や宗教施設に関する調査成果を得ることができ、幅広い知見と情報を収集することができたと思います。これらの調査は今後も継続する予定ですので、詳細は別途、報告できればと考えています。

5. 結びにかえて

今後も引き続き、金属期時代と北属期の古墓に関する考古資料の調査は行いますが、留学中の調査を通じて新たに明らかになったことは、保管されたままの古墓資料が予想外に多くあったこと、そして省単位での細密な資料集成が必須であること、さらに資料集成を元に地理的変遷も加味しながら、各省間の資料の関連づけを行っていく必要であることです。今後、資料蓄積の過程には多くの苦勞が伴うことが予測されますが、今回は訪問先の各博物館スタッフの方々が調査に対して大変協力的で、こちらも勉強させられることがたくさんありました。このように理解を示してくれるベトナムの方々には貢献できるよう、調査成果の報告を進め、相互理解に努めていかなければならないことを強く感じました。

留学中、様々な機関にて順調に調査を進めることができ、所属先のベトナム学開発科学院、そして調査時にお世話になった各省の博物館の方々、調査を支援していただいた日越の友人に感謝いたします。今後は調査成果を元に論文執筆に取り組みながら、引き続きベトナム考古学に貢献することを励みに、現地調査と交流を続けていく所存です。2年間の留学に多大なる御支援をいただきました、松下国際財団に心より感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。

【写真3枚】



調査地：ハノイ国立歴史博物館（地下が収蔵庫）



調査地：ゲアン省博物館、収蔵庫内



ハノイ：テト（旧正月）中の正月飾り売